

翻訳

ロンドンオリンピックの日韓新聞記事における一考察

Japanese and Korean newspaper articles

during the London Olympics: a comparison of discourse

山根 (吉長) 智恵¹・朴 珍希²

Chie Yamane-Yoshinaga, Jinny Park-Craig

キーワード：国家、国技、勝利至上主義、東日本大震災

Keywords : nation, national sports, doctrine of victory for victory's sake, the Great East Japan Earthquake

要旨：本稿は、談話分析を通して、オリンピックというナショナリズムが現れやすい祭典における言語使用と、その背後に現れる日韓の社会的・文化的背景を明らかにするという目的の下に、日韓の新聞におけるロンドン大会の記事を収集し、分析した。分析の観点は、①昨今のオリンピックは、国家間競争の観を帯びてきているが、見出しにはその国家意識を表出する語彙が多用されるのか。国家と対照的な家族・職場といった親密な共同体に関する語彙の使用状況にはどのような傾向が見られるのか、②国技はナショナリズムの高揚に一役買うが、日韓の国技である柔道・テコンドーの記事にはどのような傾向が見られるのか、③日韓の新聞記事に相手国はどのように報じられているのか、④東日本大震災とオリンピックはどのように関わっているのか、の4点である。①、②については、山根・朴(2011)、山根(2011)とも比較しながら分析・考察を進めた。考察から得られた知見は以下の3点である。

1. 北京大会までとロンドン大会の相違は、韓国に大きく見られた。それは、国名の出現頻度が半減し、同胞意識を強く表出する「ウリ」の出現数も減少したという点である。さらに、国技であるテコンドーの惨敗や柔道における日本に有利な判定についても、目立っ

¹ 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

² 山陽学園大学非常勤講師

て批判的な記事が見られず、韓国から日本に国籍変更したアーチェリー選手の活躍や、日本男子サッカーのチーム力についても肯定的な記事が多かった。これは、金メダル数において世界 5 位という、期待に違わぬ成績が保てたことへの自信と余裕の表れであると推察される。

2. 日本では、相変わらず「日本」を見出しとして掲げ、金メダルゼロに終わった男子柔道については、選手のインタビュー記事のみならず、紙面全体に悲壮感が溢れていた。依然として国家にこだわっている日本の姿が浮かび上がる結果となった。

3. 勝者の記事が圧倒的に多く、トップ至上主義の韓国と、敗者にも紙面を割く、敗者にも優しい日本という北京大会までの分析傾向は、今大会も変化はなかった。これは、日本社会の甘さにも通じるところだが、一方この甘さは勝利至上主義を超えたスポーツの本質を考えさせてもくれる。東日本大震災の被災地の人たちを勇気づけようと立ち上がるアスリートの姿は、心を砕かれた人々の支えとして、記事の随所に見ることができる。

1. はじめに

今年も 4 年に一度のスポーツの祭典であるオリンピックがロンドンで開催された。7 月 27 日午後 9 時に始まったこの祭典は、8 月 12 日の夜、史上初の同都市での 3 度開催という大役を無事果たし、閉幕した。今大会は、中国が国の威信をかけて開催した先回の北京大会と異なり、「五輪の主演、国から人へ」¹⁾、「選手のための五輪だった」²⁾という見出しが目に留まったが、果たしてこれまでのオリンピック報道と比較し、会期中を通してのメディアの報道に変化はあったのだろうか。

本稿では、山根・朴 (2011)³⁾の続編として、まずメディアの中で引き続き新聞の見出しに着目する。そして、両国の見出しに出現する頻出単語、共同体と関わる単語を分析し、北京大会までのデータと比較する。次に両国の記事に踏み込み、国技⁴⁾である柔道とテコンドー、両国の記事⁵⁾に見られる相手国の記事を比較する。最後に東日本大震災とオリンピック記事の関係について触れる。これらを通して、オリンピックというナショナリズムが現れやすい祭典における言語使用と、その背後に現れる両国の社会・文化について考察する。

2. 研究方法

山根・朴 (2011) と同じく、「朝日新聞」「朝鮮日報」から、オリンピックに参加した自国選手に関わる見出しを収集した。「朝日新聞」は 2012 年 7 月 26 日から 8 月 14 日まで、「朝鮮日報」は 7 月 27 日から 8 月 14 日までである。そして、その収集したデータを分析した。なお、ロンドン大会の参加国・種目数は、北京大会と同様、204 か国、302 種目である。また、日本のメダル数は金 7、銀 14、銅 17 の合計 38 個で過去最高、世界第 6 位、韓国のメダル数は金 13、銀 8、銅 7 の合計 28 個で世界第 9 位、金メダルの数としては、世界第 5 位であった。

3. データ分析

本章では、まず山根・朴 (2011) で分析された頻出単語、共同体に関する単語における

両国のロンドン大会での傾向を、見出し語において分析する。次に見出し語のみならず記事全体の中から、両国の国技(柔道・テコンドー)、相手国の記事について分析し、さらに東日本大震災とオリンピック記事との関わりについて言及する。なお、見出し語の分析については、ロンドン大会の日韓比較だけでなく、1952年のヘルシンキ大会から2008年の北京大会までのデータとも比較しているため、本稿を読み進めるにあたっては、山根・朴(2011)を参照いただきたい。

(1) 見出し語の特徴

本節では、山根・朴(2011)の、見出し語に出現するベスト 20 までの頻出単語、および家族や出身地のような、選手の共同体に関わる単語について見ていく。

1) 頻出単語(表 1 参照)

① 日本

国を示す「日本」を表す語の総数は 63 例で、2008 年の北京大会 69 例、2004 年のアテネ大会 80 例を下回ったものの、歴代 3 位である。特徴としては、「日本」単独での使用が 39 例、61.9%と、北京大会以前の大会の平均 52.1%と比較して高かったこと、表記に関して「ニッポン」「ジャパン」「JAPAN」は皆無、「J」も「関塚 J」(サッカー)、「さくら J」(ホッケー) 2 例、「フェアリー J」(新体操団体) 3 例に止まったということが挙げられる。

これに対し、競技の結果を示す「銀」「銅」「メダル」は、メダル獲得総数が 38 個と過去最高、銀と銅の数も過去最高だったため、「銀」36 例、「銅」47 例、「メダル」43 例と、これらの頻度も過去最高となった。「金」についても、獲得数は 7 個と少なかったが、柔道唯一の金メダルを獲得した松本薫選手の活躍が華々しかったこと、レスリングの吉田沙保里・伊調馨両選手の連覇などで 34 例と、これもアテネ大会に次ぎ歴代 2 位であった。上位進出選手が多かったことから「決勝」「準決勝」「勝つ」が増え、「入賞」が減少したこと、「敗北」を表す単語の中では漢語の「敗退」が突出し、さらに和語の「落ちる」「敗れる」も増えている中で、「逃がす」のみが減少したことも興味深い結果である。

また、心情と関連する「初」「涙」「夢」「期待」については、北京大会と比べ、「夢」が 6 例から 11 例と増えたものの、「初」が 31 例から 24 例、「涙」が 11 例から 4 例と大きく減少し、「期待」に至っては皆無であった。

ここから、頻度から見る語彙の特徴として、総数が 412 例となり、最も多かったアテネ大会を上回る結果となったこと、過去最高のメダル獲得数により、競技の結果に関する単語の増加が際立つ結果となったことが挙げられる。

② 韓国

国を示す「韓国」を表す語の総数は 50 例で、2000 年、2004 年、2008 年の 3 大会では各 100 例前後であった数が、その半数に激減した。また、「韓国」単独での使用がそれまでの大会では 3 割強であったのに比べ、29 例見られ、約 6 割と激増しているのも特徴的である。ただし、次に多い「韓国サッカー」「韓国ボクシング」のような「韓国」の後に競技種目が付加するものについては、11 例、22.0%と、北京大会までの割合 22.7%とほとんど変化がない。表記に関しては、「KOREA」はなく、「コリア」が 2 例、「コリアン」が 1 例に止まっている。そのうち 2 例は『チームコリア』(北と南)で出場したら「フロンティアコリアン」と、「コリア」の前出語も英語であることが特徴的である。

次に競技の結果を示す「金」「銀」「銅」については、金メダルが予想の 10 個を上回る 13

個だったにもかかわらず、43例、11例、8例と、いずれも過去3大会を下回っている。しかし、「メダル」20例、「決勝」12例、「出戦」9例、「連覇」8例、「進出」7例は過去2大会を上回っており、そのうち「決勝」「出戦」「連覇」は過去最高である。総合成績としては北京大会を下回ったが、目標の金10個を上回る成績であったことが、この数字となって表れているように思われる。ただし「メダル」については、「メダル逃し」「ノーメダル」のような否定的な意味で用いられているものも4例見られる。

また、心情と関連する「初」「涙」「期待」については、「涙」「期待」とも3例に止まっているが、「初」は33例と過去最高で、しかもこれまで最多だった2004年アテネ大会21例の1.5倍強もの数となった。これは、射撃でチン・ジョンオ、キム・チャンミ選手が、体操でヤン・ハクソン選手が初めて金メダルを取ったこと、テコンドーでファン・キョンソン選手が初めて2連覇を達成したこと、新体操でソン・ヨンジェ選手が初めて決勝に進出したことなど、快挙が続いたことが大きな理由になっていると思われる。

ここから、頻度から見る語彙の特徴としては、総数は224例で過去3大会を下回ったものの、金メダル数では世界5位、メダルの獲得数では世界9位という好成績で、またそれを支えた初快挙が多かったことから、心情を表わす「初」の増加が際立つ結果となった。

表1 頻出単語(1952-2008年までとの比較)

順位	日本	1952-2008	ロンドン	韓国	1952-2008	ロンドン
1	日本	645	63	한국(韓国)	555	50
2	金	231	34	금(金)	322	43
3	決勝	205	33	은(銀)	113	11
4	銅	189	47	첫(初)	108	33
5	初	149	24	메달(メダル)	95	20
6	メダル	147	43	우리(我々)	69	4
7	銀	144	36	동(銅)	55	8
8	予選	133	24	진출(進出)	41	7
9	勝つ	105	13	탈락(脱落)	39	3
10	進出	100	10	결승(決勝)	36	12
11	準決勝	86	17	출전(出場)	32	9
12	入賞	81	8	태극(太極)	28	1
13	涙	70	4	석패(惜敗)	28	0
14	逃がす	65	7	기대(期待)	27	3
15	敗退	60	24	연패(連覇)	25	8
16	夢	58	11	눈물(涙)	24	3
17	優勝	43	1	우승(優勝)	24	1
17	敗れる	43	5	예선(予選)	23	4
17	日の丸	43	0	승리(勝利)	21	3
20	落ちる	38	8	확보(確保)	20	1
20	期待	38	0			
合計		2673	412		1685	224

2) 共同体と関連する語彙 (表2参照)

①日本

共同体に関する語彙はバラエティに富んでいる。そこで、まず北京までの歴代の大会で頻出した語彙のロンドン大会に関する状況を述べ、次に表2以外の共同体に関わる語彙の

傾向を見ていく。

北京大会までで最も多かった「父」は、ロンドン大会でもメダルを取ったレスリング、重量挙げだけでなく、トランポリンの選手も父親の指導を受けていたため、6例とトップであった。これに対して「母」も5例とほぼ同数であるが、おもに選手のサポート役ということで挙がっていた。他にも兄弟、姉妹でオリンピックに出場した（今大会と過去の大会の両方を含む）選手が数名おり、兄弟姉妹に関する語が合計で9例見られた。一方「家族」は2例に止まっており、選手との関わりを「家族」という一集団と捉えるのではなく、「父」「母」「兄弟姉妹」のような個々との関係で示す傾向が、特に1996年のアトランタ大会以降顕著である。

これに対し、「地元」「母校」といった家族以外の集団を示す語が、2004年のアテネ大会あたりから増加しており、今大会も「地元」が6例、「母校」が5例見られる。「職場」⁶⁾が久々に3例出現し、また表2に挙げられた語以外では、「同僚」が3例見られる。団体チームのメンバーを指すものも合わせると「仲間」も5例出現する。

その他では、「先生」2例、「師」2例、「恩師」1例と、自分を育ててくれた指導者に関する語が5例出てくる。現在の日本は、学級崩壊など教育現場の問題が指摘されることが多いが、スポーツの世界では依然「師」の存在は大きく、またオリンピック選手ともなると良き師に恵まれていることがこの数字から窺える。

なお、総数は北京大会の39例を上回る41例に上り、過去最高となった。2004年のアテネ大会から頻度が多くなっているその傾向は、ロンドン大会でも同様であった。

②韓国

頻出語の数は前回の北京大会と比較して61例減少しているが、共同体に関する語は19例と、1992年のバルセロナ大会、2000年のシドニー大会の31例、北京大会の22例よりは少ないものの、1988年のソウル大会と同数で、歴代で3番目に多い数となっている。しかし、過去の大会の合計数が群を抜いて多かった「ウリ」は、「まだウリは最高を見せていない」（サッカー）、「ウリの足はあなたの手よりも速い」（フェンシング）、「お前と義母さん、そしてウリ娘のおかげだよ」（ボクシング）、「ウリ側『偶発的なハプニングであるだけ』」（サッカー）の4例に止まっている。これに代わるように、歴代で9例しか出現しなかった「父」が今大会のみで7例と、非常に多く現れている。歴代では11例と「母」のほうが多かったが、ロンドン大会では「母」は3例で、「父」の大躍進が見て取れる。

また、これまで多かった「在外韓国人」「家族」「地元」「市民」「国民」が姿を消している。最も多かったのは、これまでベスト20に挙がって来なかった「監督」で、「キム・ヨンユル総監督に選ばれ回生」「選手を信じる監督」のように、今大会では11例出現している。

ここから、「ウリ」「家族」「地元」「市民」「国民」といった集団の共同体を示す語彙が、今大会では「ウリ」以外に姿を見せておらず、そのウリの頻度も少ないという結果となった。

表2 共同体に関する単語(1952年-2008年までとの比較)

順位	日本	1952-2008	ロンドン	韓国	1952-2008	ロンドン
1	父	32	6	우리(我々)	69	4
2	地元	29	6	교민(在外韓国人)	14	0
3	家族	28	2	가족(家族)	13	0
4	母	26	5	고향(地元)	12	0
5	母校	13	5	어머니(母)	11	3
6	両親	9	0	딸(娘)	10	1
6	妻	9	0	아버지(父)	9	7
8	職場	8	3	아들(息子)	9	1
9	娘	7	1	누나/언니(姉)	9	0
10	息子	6	0	시민(市民)	8	0
11	兄	5	2	국민(国民)	8	0
11	兄弟	5	2	부모님(両親)	3	1
11	弟	5	1	오빠/형(兄)	3	0
11	姉	5	4	형제/남매(兄弟/兄妹)	3	0
15	妹	4	0	남편(夫)	2	0
15	夫	4	1	모자(母子)	2	0
15	子	4	0	약혼녀(婚約者)	2	1
15	応援団	4	0	교포2세(在外韓国人2世)	2	0
19	サポーター	2	1	아우(弟)	1	0
19	我が	2	0	손자(孫)	1	0
21	祖父	1	0	선배(先輩)	1	0
21	孫	1	0	후배(後輩)	1	1
21	姉妹	1	1			
21	親子	1	0			
21	妻子	1	1			
合計		212	41		193	19

(2) 国技に関する記事の比較：柔道とテコンドー

本節では、両国が発祥の地であるがゆえに特別な思いをもって取り上げられるが、今大会では成績が振るわなかった柔道とテコンドーの記事について分析する。

①柔道

柔道がオリンピックの競技種目として採用された東京大会から、日本男子は毎回金メダルを取ってきた。発祥国として金メダルを取ることが至上命令で、かつ暗黙の了解となっていた感があり、そのプレッシャーは大きいものであった。

今回男女7階級に出場し、男子は初めて金メダルゼロ、女子も金メダル1個、メダル数も10個の予想に反して7個に止まった。特に男子柔道で初めての金メダルゼロという結果は、それが見えてきた8月3日には、「男子柔道 後がない きょう最重量級 金へ最後のとりで」という見出しと、「柔道が正式競技となった1964年東京五輪以来、守ってきた金メダルが、初めて取れないという事態になる」という記事となり、また「日本男子柔道は、金をとり続けてきた」として、過去の大会で得た金メダルの表まで一面に掲げ、危機感を煽る始末である。

さらにそれが決定した4日には、「お家芸 今や昔 柔道男子 初の金ゼロ ランク制対応遅れる 世界のレベル上がる」という見出しと、「五輪でとり続けてきた柔道の日本男子の金メダルが3日、途絶えた。日本柔道界は大きな衝撃を受けるが、その序章はすでに

始まっていた」「AP通信のマリア・チェン記者は『日本はもう特別ではないのかもしれない。それぞれの国の柔道スタイルが確立していて、柔道は国際的なスポーツになった』と話した」という記事が見られる。そして柔道男子の金・銀・銅メダル獲得の世界分布図と、獲得メダル数1位から5位の国名を、その国の金・銀・銅メダル数とともに示している。また夕刊では、「23の国・地域メダル獲得 柔道全階級終わる」という見出しに加え、ロンドン五輪柔道の男女金メダリストの階級・氏名・国名が、表となってまとめられている。

ロサンゼルス大会金メダリストの山下泰裕は、8月1日のコラムで「全体のレベルが上がり、多くの国がメダルに絡んできている」、8月4日のコラムで「多くの選手はせいっぱい戦ったが、実力が足りなかった。大会前から『男子は金ゼロもありうる』と言われていたが、その通りの結果。謙虚に受け止めないといけない。金メダル3個と躍進したロシアは2番手、3番手の層も厚く、若手も育っている。2階級を制した韓国は負けた階級も力のある選手がそろそろ。これからの日本はよほど頑張らないとますます苦しくなる」と客観的に批評しているが、それ以外の紙面では、上記のように男子柔道で金メダルを取れなかった衝撃を大々的に取り上げている。

それでは、個々の結果について、見出しではどのように取り上げ、またプレッシャーを感じながら試合をしていた選手たちは、自分の結果をどのように語っているのだろうか。以下に選手別に見出しとインタビュー談話を例示する。

例1 平岡 (男子 60キロ級 銀メダル 7.29)⁸⁾

[平岡、集大成の銀 「これしかない」磨いた背負い投げ]

[胸張ろう 銀だ 母・妻子背負い望んだ畳]

- ・判断が甘かった。投げに行く角度とかをもっと考えていれば。
- ・なんで勝てないんだろう。負けた時、そう思った。
- ・北京で負けてから次の五輪のことだけを考えて、やってきた。自分が取って、後に続けなければならなかったのに、それができず悔しい。

例2 福見 (女子 48キロ級 メダルなし 7.29)

[福見、悲願かなわず]

[遠かった金 「これが五輪」唇かんだ]

- ・一生、悔いが残る試合だと思う。
- ・これがオリンピックかと思います。結果を出せなくて本当に悔しい。

例3 海老沼 (男子 66キロ級 銅メダル 7.30)

[海老沼、逆境で真価 「1日で変わる」教え胸に]

[亡き師に捧げる「銅」 海老沼、耐えて一本勝ち]

[銅の海老沼 自分出せず 男子 66キロ級]

- ・判定が覆るなど何回もハプニングがあって。でも会場みなさんが後押ししてくれて取れた銅メダルです。
- ・金メダルしか目指してなかったので、ダメだと思います。
- ・監督とともに戦う。

例 4 中村（女子 52 キロ級 メダルなし 7.30）

[中村、宿敵に初戦敗退]

[中村、涙止めた 4 年]

- ・まだ自分の強さが足りないと思った。

例 5 中矢（男子 73 キロ級 銀メダル 7.31、8.1）

[中矢 寝技の申し子 磨いた立ち技 万能型への飛躍]

[中矢「銀」母と取った 「次こそ」夢は終わらない]

[銀の中矢 視線は次]

- ・決勝は相手に有効を取られてから、まだ 1 分半ぐらい試合があったのに最後まで攻めきれずに追いつけなかった。すごく悔いが残る試合になった。
- ・金メダルを持って帰ることを目標に掲げていたので、この色のメダルはあまりうれしくない。次に生かせるようにがんばりたい。
- ・すごく悔いが残る試合。金メダルしか見ていなかったの。
- ・すごく悔しかったが、一晩寝て、自分の実力ではまだ銀メダルしか届かないのだと実感した。
- ・負けても負けても応援してくれる人⁹⁾。
- ・母さんは神様かと思った。

例 6 松本（女子 57 キロ級 金メダル 7.31、8.1）

[松本 金 日本勢初 止まらぬ猛攻 頂点]

[松本 野生の切れ味 窮地の日本柔道救った]

[松本「金」仕留めた 野獣の射る眼力、最後は涙 母校・喜び爆発]

[松本 言い聞かせた金 気持ちで絶対負けない 最後の最後まで戦う]

[金メダル「24 年すべて凝縮」 松本が会見]

[延長 金に後輩感激 柔道・松本選手の母校帝京大 優しい先輩 活躍を予感 堅実さ奏功]

[粹と雅でツリーも祝福]

- ・自分一人の金メダルじゃないかと、勝った瞬間に思った。日本最初の金はうれしいです。一番というのは。
- ・2 人（福見、中村）が応援してくれたので、その分もがんばろうと思った。
- ・一番は好きなのでうれしいです。
- ・世界選手権と違い、五輪は代表が一人。表彰台で聞いた君が代は、これまでと全然違った。
- ・日本柔道らしい一本が取れなかったが、体力が続いて最後まで戦えた。金メダルのためにやってきたので、うれしくて自然と涙がこみ上げてきた。
- ・ビッグパフェが食べたいが、選手村にはない。
- ・お菓子やアイスクリームが好きなのに、禁止令が出ていた。それを我慢していたのがつらかった。

例7 中井 (男子 81 キロ級 メダルなし 8.1)

[中井 メダル逃す]

・先輩たちがメダルをここまで取ってきたのに。自分も続きたかった。本当にメダルがほしかった。

例8 上野 (女子 63 キロ級 銅メダル 8.1)

[上野 諦めず銅]

[上野、姉を追いかけ]

[上野、立て直し銅]

- ・五輪は新鮮な感じだった。終わってみれば楽しかった。
- ・頼もしい姉がいて、いい見本になった。恵まれてました。
- ・すっきりしました。

例9 西山 (男子 90 キロ級 銅メダル 8.2)

[西山 判定にめげず意地]

・全部勝たなかった。不細工な試合でもいいから勝たなかった。

例10 田知本 (女子 70 キロ級 メダルなし 8.2)

[田知本 メダル逃す]

・もったいない逆転負けだった。

例11 穴井 (男子 100 キロ級 メダルなし 8.3)

[男子柔道 後がない きょう最重量級 金へ最後のとりで 穴井、2回戦で敗退]

[穴井 エースの重圧]

- ・これが勝負だと思う。応援してくれた人たちへ、ありがとうございますという気持ちと、勝てなくて申し訳ありませんという気持ちです。
- ・しっかり寝技も練習してきたつもり。でも、我慢が足りなかった。

例12 緒方 (女子 78 キロ級 メダルなし 8.3)

[緒方、2回戦敗退]

- ・すごくきらきらしたところでわくわくした。がんばんなきゃ、と。
- ・取って取られての中で、いつもより自分らしさが欠けていた。
- ・がつつ行く柔道をもっと追究したい。

例13 上川 (男子 100 キロ超級 メダルなし 8.4)

[上川、執念いずこ]

・とにかく金メダルを取りたかった。

例14 杉本 (女子 78 キロ超級 銀メダル 8.4)

[杉本、傷だらけの勲章 「けがって、意味がある」]

[杉本 決勝攻めきれず]

- ・金を目指していたので悔しい。思い切りいけば良かった。
- ・ちょっと休んで沖縄に行きたい。

出場選手 14 人の結果は、金メダル 1 人、銀メダル 3 人、銅メダル 3 人、メダルなし 7 人である。見出しについては、メダルを逃した 7 選手については、「悲願かなわず」「初戦敗退」「メダル逃す」のように結果を受け止めた文言が使用されている。逆にメダルを取った選手に関しては、金メダルを獲得した松本選手への「窮地の日本柔道救った」という最大級の賛辞は別として、それが金メダルでなくても「胸張ろう」「逆境で真価」「万能型への飛躍」「諦めず銅」「判定にめげず意地」のように、肯定的な見出しとなっている。ただし、銀メダルの杉本選手、銅メダルの海老沼選手については、「決勝攻めきれず」「自分出せず」のように否定的な見出しも出現している。

一方、選手のインタビュー談話は、金メダルを獲得した松本選手の「日本最初の金はうれしい」「一番は好きなのでうれしい」「ビッグパフェが食べたい」という素直な喜びの表出と余裕ある茶目っ気の談話を除き、「なんで勝てないんだろう」「一生、悔いが残る」「まだ自分の強さが足りない」「金メダルしか目指してなかったのでダメ」「金メダルを持って帰ることを目標に掲げていたので、この色のメダルはあまりうれしくない」「本当にメダルがほしかった」「全部勝ちたかった」「勝てなくて申し訳ありませんという気持ち」「とにかく金メダルを取りたかった」「金を目指していたので悔しい」のように、メダルを獲得していてもそうでなくても、敗者の弁であることが明らかである。特に男子選手はすべてが勝敗にこだわった発言をしており、日本の男子柔道選手が背負う宿命を感じさせる。

この傾向は山根（2011）の北京オリンピックのインタビュー談話と同様であるが、そこで述べられているもう一つの傾向、家族やお世話になった人に対する感謝の念の表出も同様である。14 選手のうち、6 選手に「会場のみなさんが後押ししてくれて取れた銅メダル」「監督とともに戦う」「母さんは神様かと思った」「自分一人の金メダルじゃないな、と勝った瞬間に思った」「頼もしい姉がいて、いい見本になった。恵まれてました」「応援してくれた人たちへ、ありがとうございますという気持ちと、勝てなくて申し訳ありませんという気持ちです」の談話が見られるからである。また、もう一つの傾向である「一本へのこだわり」についても、「耐えて一本勝ち」という見出し、「日本柔道らしい一本が取れなかったが、体力が続いて最後まで戦えた」という松本選手の談話に、各国選手のレベルが上がり、すんなりと一本勝ちをすることが難しくなった今大会でさえ、伝統の「一本」という言葉が息づいていることが垣間見える。

②テコンドー

前回の北京大会では出場した 4 選手すべてが金メダルだった韓国だが、その国際化が進むにつれ、柔道と同じく世界各地に強豪選手が出現するようになった。その結果、今大会では、金メダル、銀メダル各 1 個を獲得するに止まり、残り 2 階級でのメダル獲得はならなかった。この国際化の様子を新聞では次のように伝えている。

例 15 韓国のテコンドーは 2008 年の北京オリンピックで金メダル 4 個を獲得した。ロン

ドンでも4年前の栄光の再現を狙うが、現実的な目標は、2～3個で考えている。世界的な平準化が顕著になり、宗主国である韓国の立場は以前とは違うのだ。(8月8日)

例16 2008年北京オリンピックで韓国はテコンドー4つの階級(全体の8階級)に選手を送り、みんな金メダルを獲得した。しかし、今回のオリンピックでは初めて決勝戦を迎えたイ・テフン(竜仁大)は惜しくも銀メダルにとどまった。韓国がテコンドー宗主国の自尊心を守り、北京大会(金13・銀10・銅8)を超える歴代最高成績を上げるかどうかはチャ・ドンミン、イ・インジョンのつま先にかかっている。(8月11日)

例17 宗主国韓国が制圧してきたテコンドーに外国人選手たちの活躍が目立つ。(8月11日)

例18 テコンドーが正式種目に採択された2000年のシドニーオリンピック以降、オリンピックのテコンドーで金メダルを獲得した国が徐々に増え、テコンドーの「世界の平準化」はますます加速している。ロンドンオリンピックのテコンドーの試合は、二日目の10日までの4個の金メダルは中国、スペイン、英国、トルコに行った。2008年北京オリンピック当時、8つの金メダルを韓国(4)・メキシコ(2)・中国(1)・イラン(1)など、主にアジアで分けていたものと比較すると、ヨーロッパ勢の躍進が目立つ。(8月11日)

オリンピックの正式種目として採用されたのが2000年のシドニー大会からと、柔道の1964年に比べてかなり遅かったテコンドーでは、今回の敗北を個々の選手の敗北ととらえ、国技の窮地ととらえる表現は見あたらない。また、この一因として、北京大会の金メダリストを育てたムン・ウォンジェ韓国体育大学教授が、イギリスのチームコーチに就任するというような、近年どの国にも存在するコーチの海外流出があり、むしろ、世界に普及したことによる当然の結果として受け止められている感がある。

国技の窮地という意識が柔道に比べて薄い背景には、もう一つ理由がある。それは、オリンピック肥大化の見直しのため行われる種目削減の対象に、テコンドーが挙げられていたということである。この「オリンピック退出説」に苦しめられた世界テコンドー連盟は、「大々的な革新」に乗り出し、採点方式の変更、電子防具およびビデオ判読導入に踏み切った。たとえば、採点方式については、攻撃を差別化して2点の頭の攻撃に最高4点(基本3点に回転攻撃時1点追加)まで与えるというものであった。また、10秒間攻撃がなければ減点する「10秒ルール」も導入した。こういったことにより、緊張感があふれ、また正確な判定も行えるようになったことで、存続する可能性が高まったといえるが、この「生き残り」の危機のほうが、国技の窮地より深刻だったわけである。

それでは、選手に関する見出しとインタビュー記事はどのようなものであつたらうか。以下に挙げる。

例19 イ・テフン(男子58キロ級 銀メダル 8.10)

[減量失敗……泣いてしまったテコン V; グランドスラム狙って一階級下げたイ・テフン、銀メダル]

・金メダルはもちろん、迫力あふれる試合で人々にテコンドーの楽しさを知ってもらいたい。

・スペインの選手が私より上手だった。

・私も一生懸命に訓練したが銀メダルに終わったことを見れば、流した汗が足りなかったようだ。より徹底的に準備して、4年後には必ず表彰台の一番上に立つ。

例 20 チャ・ドンミン（男子 80 キロ以上級 メダルなし 8.11）

[テコンドー平準化されたというが……この足に宗主国のプライドをかける;今日予選、明日の決勝……チャ・ドンミン 2 連覇に挑戦、30 歳のイ・インジョン初出場]

・今回は私が主人公。

・北京オリンピック当時、決勝戦が野球の決勝と重なって金メダルを取る場面を家族も TV で見られなかった。今回はチャ・ドンミンの名前をしっかりと知らせる。

例 21 イ・インジョン（女子 67 キロ以上級 メダルなし 8.11）

[テコンドー平準化されたというが……この足に宗主国のプライドをかける;今日予選、明日の決勝……チャ・ドンミン 2 連覇に挑戦、30 歳のイ・インジョン初出場]

・三十 お祝い、これからが始まり。

・片思いの「同じ教会の先輩」がいるが、オリンピックで金メダルを取ったら堂々とプロポーズする。

・愛と金の両方をつかみたい。

・今回は必ず金メダルを首にかけて帰る。

例 22 ファン・キョンソン（女子 67 キロ級 金メダル 8.13）

[“記録のテコン V”ファン・キョンソン、オリンピックの初 2 連覇;韓国テコンドー唯一の金メダル…… “闘病中のお母さんに捧げる”]

・26 年の間、子供が全てだった母に金メダルを捧げる。韓国に帰ったら両親と済州島旅行に行きたい。

ここから、お世話になった家族への感謝の念、金メダルへの強い決意、次回の大会でのリベンジなど、日本の柔道選手と変わらない思いが語られていることが見て取れる。

(3) 相手国から見た韓国と日本

ロンドン大会では、国籍変更選手や両国の対決などで、お互いの国についての記事が目立った。本節では、それらの記事に出現した「韓国」と「日本」について取り上げる。

①日本の記事に出現した「韓国」

ここでは、女子アーチェリー（例 23）、男子柔道（例 24）、男子サッカー（例 25）、女子バレーボール（例 26）の 4 種目を見ていく。

まず、国籍を変更し、日本の女子アーチェリー界に初めてメダルをもたらす立役者となった早川選手が取り上げられている。しかし、オリンピックの場合、他の大会と異なり、国の代表として出場するため、活躍すれば国籍を変更した国では称賛されるが、された国

では非難の対象となり、また活躍できなければ変更した国で批判されることにつながる。一個人としての競技結果のみならず、「日本」と「韓国」の両国を意識せざるをえない厳しさが以下の文言から窺える。

次に男子柔道では、判定を巡る問題と韓国選手の活躍といった点から取り上げられている。今大会では、柔道以外にも誤審に苦しめられた韓国だが、チョ・ジュンホ選手と海老沼選手の試合で旗判定が覆るといった前代未聞のジャッジが行われた。この点について、記事では最終判定だけでなく、それ以前の判定も併せて取り上げている。そして、海老沼選手が勝者となった判定に満足するのではなく、ジュリーの介入の問題点を指摘した、客観的なコメントも載せられている。また、韓国柔道の復活について、日本のふがいなさとの対照的にその素晴らしさを称えている。

第3に男子サッカーについては、3位決定戦と韓国チームのコーチである池田氏について触れられている。そして、この池田フィジカルコーチの存在が貴重だったこと、またJリーグに在籍する韓国選手の存在が勝利に大きく貢献したことが取り上げられている点については、やや恩着せがましいところはある。しかし、韓国が日本より国際化への対応にすぐれていたことは、素直に評価されている。兵役免除といった韓国の特殊事情も指摘されているが、それについて否定的な文言はなく、両国の活躍が国を超えてアジアサッカーの未来につながる期待が込められた内容となっている。

最後に、同じく銅メダルを争った女子バレーボールについて取り上げられているが、3位になったにもかかわらず、男子サッカーより記事の分量は少ない。ただ、侮れない韓国の強さについては触れられている。

例 23 早川漣 (女子アーチェリー団体 銅メダル 7.30、8.3、8.14)

[リーダー早川 銅射抜いた 韓国から国籍変更「次は姉と金」]

[ふたつの国のはざま 心揺れた アーチェリー・早川]

・この日は、準決勝で2人の母国の韓国と対戦した。「特別な思いはない」と語っていたが、力を出しきれなかった。「心の中で動揺があった」と思う。

・姉妹での五輪出場と、打倒韓国と、金メダル。そんな夢は4年後まで続く。

・「国籍を変えた選手」と報道されるたび、心ない批判が聞こえた。韓国のSNS¹⁰⁾では「国を捨てた」と書かれ、日本の掲示板には「韓国に帰れ」と書かれた。一方で、たくさんの祝福も受けた。韓国の幼友達から、大学の友人から、勤務先の同僚から。新海さんは個人戦の前、励ました。「大丈夫。れんは日本人なんだから」

・試合後、「日本にアーチェリーを広め、韓国といい勝負ができるようにしたい。引っ張っていきます」と話した。

・早川は今季不調が続いていたが、蟹江は信じていた。「漣ちゃんなら大丈夫と思ってました」

例 24 男子柔道 (7.30、8.2、8.4、8.9)

[海老沼 銅 柔道 66キロ 準々決勝 旗判定覆る]

[誤審五輪 怒る韓国 水泳・柔道……不利な判定続出]

・チョ・ジュンホ (韓国) との準々決勝では、主審と副審の計3人による旗判定で負けと

されたが、審判委員（ジュリー）からの指摘で判定がやり直しとなり、結果が覆る前代未聞の事態があった。

・今回は、ジュリーが海老沼選手の「有効」を取り消させ、さらに旗判定でもう一度取り消しを求めたことになる。

・国際柔道連盟のハルコス審判委員長は、『有効』は我々の責任で取り消させた。我々（審判委員）は、全員が白（海老沼）が優勢だと判断した」と話した。

・全日本柔道連盟の吉村和郎・強化委員長は「ジュリーが試合全体を止めて指摘することが多すぎる。向こうに旗が上がることで自体がそもそもおかしい」と話した。

・一番近くで見ている主審、副審2人の全員が「有効」と判断したわけだから、取り消す必要はまったくなかった。……ジュリーは主に3人で二つの試合会場をチェックしている。延長までの8分間をずっと監視するのは難しい。問題の試合、序盤は韓国選手が圧倒的に攻めていた。3-0かどうかは別にして、トータルで判断すれば、韓国選手の旗を上げる判定もあり得るだろう。（岡田弘隆全日本柔道連盟審判副委員長、バルセロナ五輪銅メダリスト）

・2階級を制した韓国は負けた階級も力のある選手がそろそろ。（山下泰裕）

・男子90キロ級の記者会見では韓国人記者が、銅の西山選手に「日本がメダルを独占しなくなったことについてどう思うか」と質問。西山選手は「最近、日本の柔道は弱いと言われる。すごく悔しい」と答えた。

・81キロ級のキム・ジェボム（韓国）は、2008年北京大会の決勝で敗れたビショフ（独）に雪辱を果たした。

例25 男子サッカー（8.10、8.11、8.12）

[銅メダルかけ未明に韓国戦]

[男子、前線の競り合いカギ 明日未明 韓国と3位決定戦 永井負傷が影響 逆転は至難の業]

[戦友、そしてライバル 韓国代表、5人がJリーグ所属 男子日韓戦]

[韓国代表 日本人が支える 男子サッカー 池田コーチ 日本と大舞台で戦えるのは幸せ]

[サッカー 韓国に敗れ4位 男子あと一歩 越えられぬ壁 悔しさ胸に]

[アジアにとってすばらしい]

[メダル 韓国悲願]

・韓国には20歳以下ワールドカップの出場権をかけた試合で、4年前、2年前と連続で敗れた。清武は「日韓戦は特別な試合。勝って、日本は強いというところを見せたい」と雪辱を誓った。

・日韓の選手たちはJリーグのクラブでともに戦う仲間でもある。韓国選手は日本と同様に海外でのプレーを志し、日本は最も身近な移籍先だ。韓国代表を率いるホン・ミョンボ監督も、J1 柏などでプレーした韓国人Jリーガーの草分けだ。「日本のことはよく分かっている。チームにJリーガーも多いことも助けになる」と話す。日本代表の主将・DF 吉田麻也選手は韓国の選手には、(メダル獲得による)兵役免除もかかっている。間違いなく難しい試合になる」と話す。

- ・初のメダル獲得に喜び、太極旗を掲げてピッチを駆け回る韓国選手。日本の選手たちがへたりこむ中で、主将を務めた DF 吉田麻也選手は最後まで屈辱的な場面を見届けた。「これが現実。目に焼きつけておいた。サッカーをやっている限り、今日のことは忘れることはない」
- ・韓国が先制ゴールを決めると、一気にテーハーミングッ！（大韓民国）が響き出す。歓喜にわく韓国サポーター。「五輪の 4 強に韓国と日本が進出したこと自体、アジアサッカーにとってすばらしいこと。本当は決勝戦で会いたかった」
- ・コリアタウンとして知られる東京・新大久保。韓国料理店「トマトリ」には日韓合わせて約 30 人のサポーターが詰めかけた。前半 36 分の韓国先制点には、「アッサー（やったー）」とガッツポーズ。
- ・韓国を勢いづける先制点を奪ったのは、27 歳のエース、FW パク・チュヨンだった。…オーバーエージ枠で五輪に参加しているのは、クラブで必要不可欠な戦力でないことの裏返しだ。そうした屈辱を、前向きな力に変えた。追加点もドイツで活躍する MF ク・ジャチョル。「韓国人にとって、大事な試合だった。初のメダリストになったことを誇りに思う。」
- ・韓国サッカーの黄金時代をつくる夢を、選手たちが実現してくれた。兵役免除は選手個人のためだけでなく、韓国サッカー界の将来にとってもいいことだろう。（韓国：ホン・ミヨンゴ監督の談話）
- ・差を生んだのは、国際経験の差。代表チームが出場する U20W 杯などの国際大会だけでなく、欧州でのプレー経験も韓国が上回る。（元日本代表主将 宮本恒晴のコラム）
- ・韓国のレベルアップに全力を尽くすことが、日本のレベルアップにもつながると信じてやってきた」（池田コーチの談話）

例 26 女子バレーボール (8.11、8.12)

[3 位決定戦「集大成」バレー女子 今夜韓国と対戦]

[28 年ぶりメダルに挑む 今夜 銅かけ韓国戦]

[迫田爆発、韓国に完勝 「背中押された」23 得点]

・真鍋監督は韓国について、「間違いなく強い。キム・ヨンギョンという世界一のプレーヤーもいる」。最近 10 試合は 9 勝 1 敗だが、その 1 敗が 5 月にあった五輪の切符をかけた最終予選。キム・ヨンギョンに 34 得点され、1-3 で完敗した。日本の勝機について、真鍋監督は「一人ひとりを比べると日本は劣っているが、バレーはチームスポーツ。粘り強く、長い展開に持ち込みたい」と話した。

・韓国バレー界で「100 年に 1 人の逸材」と言われる通り、躍進の原動力となっている。同僚だったセッター竹下は「ますますレベルアップしている」と警戒。

・日本が韓国を破り、28 年ぶりの銅メダルを獲得すると、歴史的な瞬間を見届けた観客席からは大歓声が上がった。……「銅メダルの瞬間を見られて感動している。韓国に敗れた男子サッカーの雪辱も果たすことができた」

②韓国の記事に出現した「日本」

ここでは、アーチェリー (例 27)、男子柔道 (例 28)、男子サッカー (例 29) の 3 種目

を見ていく。

まず、韓国がこれまでも得意種目としているアーチェリーに対する日本の大躍進について、男子は「完全制圧」という見出しで「韓国強し」のイメージを植えつけることに成功している。一方、女子の帰化選手オム・ヘリョンについては、団体・個人とも韓国が金メダルを獲得したからか、「自発的なアーチェリーをしながら楽しんでいる」と、韓国と好対照な日本の雰囲気、批判することなく伝えている。

次に男子柔道であるが、判定問題については、日本のファンや海老沼選手の表現に否定的なニュアンスが感じられるが、日本のマスコミも判定に疑問を呈したこと、最終的にはチョ・ジュンホ選手も海老沼選手と同じ銅メダルだったことから、そのトーンは激しいものではない。また、中谷選手や西山選手の名前が世界ランクとともに見出しや記事に現れていることも興味深い。

最後に男子サッカーであるが、人気種目だけあって、非常に多くのページを割いて、詳しい記事が掲載されている。そこには、日本ネチズン¹¹⁾が書き込んだ「韓国が勝った。最悪だ」という記事、同じ宿泊先での緊張状態を伝える記事があるものの、同じアジアのチームの躍進、永遠のライバルである日本、最近の日本の侮れない力量、日本のチーム力に対する賛辞、ホン監督が柏レイソルで学んだこと、池田コーチがベスト4進出に貢献したことなど、日本に対する肯定的な記事も目立った。もちろん兵役免除についても触れられている。

例 27 アーチェリー (7.31、8.4)

〔“韓国から帰化したオム・ヘリョン 日本アーチェリーの歴史書き換える”〕

〔31歳長男の力……オ・ジンヒョクの弓、7対1で日本を完全制圧;アーチェリー男子個人金衝突……オリンピック代表2回脱落后、酒で過ごしていたが総監督の助けで復活〕

・日本のマスコミは、銅メダル獲得のニュースを「アーチェリーの新しい歴史を書いた」と大々的に報道した。日本のマスコミは、特に初のメダルを取るのに決定的な貢献をした日本チームのキャプテンに注目した。彼女は他でもない韓国から帰化したオム・ヘリョン（日本名：早川れん）である。日本チームの主将を引き受けているオム・ヘリョンは、韓国で実業団チームの選手であったが、母が日本人と再婚し、2009年、日本に帰化した。オム・ヘリョンは日本のマスコミとのインタビューで、「日本女子アーチェリー史上初のメダルという歴史を作って嬉しい」と言いながらも「まだ上を目指さなければならない」と金メダルに対する意欲を隠さなかった。彼女は「韓国では4位だと一体何をしていたのかと叱られるが、日本では祝ってくれる」とし、「日本ではスパルタ式の訓練ではなく、自発的なアーチェリーをしながら楽しんでいる」と語った。

・アーチェリー男子個人決勝の最終スコアは7対1。第5シードで決勝に上がった日本の古川高晴を抜いたオ・ジンヒョクの金メダルだった。

例 28 男子柔道 (7.30、7.31、8.2)

〔日本のメディアも“バカ3人組柔道審判”;チョ・ジュンホ 日本・海老沼準々決勝……審判委員長、主審・副審呼んで下した判定覆る “ビデオ判読導入”後初めて〕

〔スタイル変えたワン・キチュン 今日出撃(出場);背負い投げで休まずに攻撃……守備

中心から変身、世界第2位の中谷が競争相手]

・チョ・ジュンホがロンドンオリンピック男子柔道 66kg 級の銅メダルを獲得した。しかし、ベスト4進出の目前で理解できない判定をひっくり返されて敗者戦に回され、金メダルを狙うチャンスを逃した。水泳、パク・テファンのすっきりしない失格に続き、二日連続のロンドンオリンピックでの韓国選手団の受難が続いた。

・競技場を埋めた日本のファンのブーイングの中、海老沼は不満げな表情で競技場を離れなかった。ビデオ判定を終えた後、海老沼の優勢を認め、判定が全く逆にひっくり返った。今回はチョン・フン監督と大韓柔道会の役員らが抗議したが、結果は覆されなかった。

・日本のマスコミも速報で「審判委員長の反対で、判定が覆る異例の展開が起こった」(スポニチ)、「みんなに後味の悪い判定」(日刊スポーツ)と伝えた。日本の共同通信も『『バカ三銃士 (The Three Stooges)』の映画をパロディ化したように、3人の審判がしばらくの会議を終えて初めて降りた判定を覆した」と皮肉った。

・盗まれた心境でした。初めはとても慌てたが、監督が次の試合の話をしたんです。銅メダルをとる機会が残っていたので。痛い右腕を見て歯を食いしばりました。

・チョ・ジュンホは海老沼と試合中、背負い投げをしようとした時“ぼきん”という音を聞いた。右肘の靭帯が切れる音だった。敗者復活戦に上がったチョ・ジュンホは右ひじをテープでぐるぐる巻いたまま試合をした。銅メダル決定戦でもう一度判定まで行ったが、銅メダルを獲得した。日本の海老沼も準決勝で敗れた後、銅メダル決定戦で銅メダルを首にかけた。

・ワン・キチュンの最も強い競争相手は世界ランキング2位の中谷力(23・日本)だ。

・今回の大会では将士(日本・世界3位)との準々決勝、ティアゴカミロ(ブラジル・世界8位)との準決勝でも背負い投げで得点の半分を獲得した。

例 29 男子サッカー (8.6、8.9、8.10、8.13)

[ホン・ミョンボ監督を将軍扱いする日本人;体力担当の池田コーチ、Jリーグ選手時代のご縁で……]

[目での威嚇も負けられない……韓日 ホテルでも気力の戦い;同じ宿 韓国3階、日本5階……韓日コーチングスタッフ4階使用]

[日本キラー(パク・チュヨン)対サッカー場のボルト(50m 5秒8で走る永井)……大韓海峡が沸く;明日午前3時45分宿命の韓日戦……観戦ポイント]

[日本キラー、ゴールで話す。パク・チュヨン 守備4人抜いて初ゴール]

[“札幌惨事”1年ぶりにゴールで返す;キャプテンのク・ジャ Chol、ネットを突き刺すようなゴールで仕上げ]

・ロンドンオリンピック男子サッカーは来る8日、韓国、ブラジル、日本、メキシコのベスト4対決に絞られた。ヨーロッパのチームがみんなメダル圏から脱落した中で、アジア両チームが旋風を巻き起こす。

・準決勝で韓国と日本が並んで勝利を収めた場合の決勝戦は韓日戦になる。オリンピックサッカー決勝戦でアジアのチームが進出した前例はない。アジアサッカーの歴代オリンピック最高成績は、日本の1968年のメキシコオリンピック銅メダルだ。しかし、今回の大会で韓国と日本は相次いで強豪を制して勢いに乗っており、“アジアの反乱”が実現する可

能性もなくはない。

・日本は準々決勝でエジプトを相手に 3 対 0 で快勝し、チームの雰囲気は最高潮に上がっている。日本は攻撃と守備の両方の質が際立って見える。

・日本ではメキシコオリンピック以来、サッカー代表チームが 44 年ぶりにオリンピックベスト 4 に進出し、熱狂的な応援を送っている。柔道男子で史上初めて‘ノーゴールド’に止まるなど、選手団全体が金メダル 2 個にとどまっているので、サッカーに大きな期待をかける雰囲気だ。

・日本ネチズンたちは、自国チームの宣伝と一緒に英国敗北に多少複雑な反応を見せた。“韓国は日本と戦えば 30%程度能力が上がる”“決勝はブラジルがよい”“韓国が勝った。最悪だ”のような文を載せた。

・主将のク・ジャ Chol は“韓日戦の重要性はどのような言葉でも表現できない”とし、“すべての力を注ぎたい”と話した。

・最近、韓国サッカーが日本に弱い姿を見せたのも今回の韓日戦がより一層関心を引く理由だ。韓国が敗れた 2 試合にすべて出たキ・ソンヨンは“日本と対戦すると負担が大きいですが、勝てば金メダルを取ったかのように嬉しいと思う”と話した。

・韓国の DF キム・ヨングォンは「日本は個人よりもチームが優れている」と話した。

・韓国選手団は（ホテルの）3 階、日本は 5 階に荷物を降ろしたが、韓国と日本のコーチングスタッフ宿舎がすべて 4 階に割り当てられて妙な緊張感が形成されている。大韓サッカー協会の関係者は“まるで休戦ラインを挟んで対峙したような雰囲気だ”と伝えた。両チーム選手団は、ホテル内で頻繁に出会うがほとんど目を合わさない。

・特に日本は韓国代表チームの情報力に警戒心を持っていることが分かった。J リーグで選手生活をしたホン・ミョンボ監督をはじめ、日本人フィジカルコーチの池田さん、最近まで J リーグで選手生活をしたキム・ボギョン（カーディフ・シティ）、キム・ヨングォン（広州）、現在の J リーグ所属のファン・ソクホ（広島）、ペク・ソンドン（ジュビロ磐田）、チョン・ウヨン（京都サンガ）などが、日本選手団についてよく知っているからだ。

・歴史に残るサッカー韓日戦が目の前に迫ってきた。永遠のライバル韓国と日本が銅メダルをかけて 3~4 位決定戦を繰り広げる。

・彼（ホン・ミョンボ監督）は選手時代、日本に強かった。自分が戦った韓日戦では一度も負けなかった。J リーグで活躍し、日本サッカーを誰よりもよく知っている。

・2002 韓日ワールドカップでベスト 4 を達成し、世界を驚かせた韓国サッカーが 10 年後 2012 年ロンドンオリンピックで史上初めてメダルを獲得し、再び転機を迎えた。

・キム・ボギョンとキム・ヨングォンなど、最近まで日本の J リーグで活躍した選手やファン・ソクホとペク・ソンドンなど、現在 J リーグで活躍する選手たちは、日本との 3 位決定戦対決で威力を見せた。

・パク・チュヨンのロンドンオリンピックはハッピーエンドだった。去る 6 月、兵役逃れの論争の記者会見で、“パク・チュヨンが軍隊に行かなければ、私が代わりに行く”という、冗談半分で心強い盾になってくれた師匠にパク・チュヨンは、日本戦決勝ゴールで応えた。

・ホン監督は今回の大会で節目ごとにカリスマあふれる一言で選手たちの心をぎゅっとつかんだ。日本 J リーグ柏レイソルの主張をした当時の監督の指示で毎試合開始前‘5 分スピーチ’をしなければならなかったことが大きな助けになった。

・池田コーチは韓国オリンピックベスト4進出の隠れた功労者とされる人物である。肩書きは選手たちの体力管理を担当するフィジカルコーチであるが、戦術的な部分だけでなく、選手たちの心理カウンセラーまで自認する。

(4) 東日本大震災とオリンピック

先回の北京大会から今回のロンドン大会までで、両国に関わる最も大きな出来事は、日本の東日本大震災である。本節では、この未曾有の災害が、祭典であるオリンピックの記事とどのように関わっているかを見ていく。

震災に関連して取り上げられた選手は10名である。その中で、故郷が被災地だった選手が6名いる。フェンシングの仙田選手(①)、卓球の福原選手(②)、ケイリンの渡辺選手(③)、レスリングの伊調選手(④)、小原選手(⑤)、サッカーの岩清水選手(⑥)である。次に被災地を訪問した選手が2名いる。レスリングの吉田選手(⑦)と陸上の室伏選手(⑧)である。また、所属先と震災が関わっていたサッカーの鮫島選手(⑨)、そして被災地の人のためにチャリティーを行ったインドネシアのヒダヤト選手(⑩)がいる。それらの選手に関する見出しとインタビュー記事は以下の通りである。

① [津波で逝った親友へ] (7.28)¹²⁾

- ・自分にできることはフェンシングしかない。
- ・メダルを取って、被災地のみなさんに明るいニュースを届けたい。
[三陸の剣士 仙田、亡き親友に届けるメダル] (8.6)
- ・親友の母：被災地の人たちが震災を忘れて試合に夢中になれたと思う。

② [愛スマイル 次こそ 被災地の思い 力に] (8.1)

- ・ショックで涙が止まらなかった。
- ・絶対、仙台にメダルを持って帰りたい。

③ [帰れぬ故郷 背に疾走] (8.8 朝刊)

- ・みんなに勇気を与えるようなレースをする。
[双葉町から挑戦 渡辺惜しい11位] (8.8 夕刊)
- ・福島の人々の思いを乗せて走りたい。
- ・メダルをとり、震災時に支援をしてくれた国々に礼を言いたかった。

④ ⑤ [ともに地元被災 獲得『よかった』] (8.10)

- ・二人で同じ日に金メダルを取る姿を見せられて良かった。

⑥ [なでしこ 東北魂と共に DF岩清水] (8.10)

- ・東北のみなさんへ 忘れたことはありません。メダルを持ってみなさんのところへ会いに行きます。待っていて下さい。共に歩もう！ 東北魂！！
- ・私も一緒という意味を込めたかった。

⑦ [被災地に『金』を] (7.28)

・土台しかない家があったり、防波堤がなくなっていたり。涙が出そうになった。

⑧ [室伏、被災地との約束] (8.6 朝刊)

・みんなから勇気をもらった。

[室伏、東北の応援を力に] (8.6 夕刊)

・きょうの目標はメダルをとること。多くの方の応援、支えを受けて取り組んできたので、よかった。

⑨ [なでしこ ひたむき 冬の時代を忘れぬ 王者キックオフ] (7.25)

・東日本大震災の影響で、DF 鮫島彩選手が所属していた東京電力の女子サッカー部「マリーゼ」は休部に。

⑩ [日本のためチャリティー試合 インドネシアのヒダヤト] (8.8)

・日本とインドネシアは近い。できることは小さいことかもしれないけど、頑張ろうと思った。

・被害を受けた方の生活が少しでもよくなっていることを祈っている。

大会は、7月28日から8月13日の17日間であったが、上記記事の日付から、約3分の1の日数に震災と関わる見出しと記事が出現したことが見て取れる。震災後は様々な有名人が被災地を訪れたり、各地で募金を行ったりしたが、アスリートたちもそれらの活動に積極的に参加した。親戚の家が流される、親友を失うといった悲しみと、そういった中、自分だけが競技を続けてよいのか、という葛藤を抱えながら、生き残った自分がアスリートとしてできることは、とにかくメダルを取ることだと決意し、それを実行した姿が、上記の言葉から窺える。事実、上記10名のうち、3名が金メダル、4名が銀メダル、1名が銅メダルを獲得している。このことはまた、この大災害の中、懸命に生きる人々がアスリートたちの心の支えとなり、そのことがアスリートに大きな力を与え、メダル獲得に寄与したともいえる。

また、震災の際に世界各国から多大な援助を受けたが、その代表のような形として、地震国インドネシアのスポーツの英雄で、アテネ大会の金メダリストであるヒダヤト選手の記事が取り上げられている。インドネシアの他の五輪メダリストとともに来日し、まだ時々地震が発生する東北地方などを巡ってチャリティーマッチを行い、また仙台で津波の被害を見て回った。ロンドン大会ではメダルには手が届かなかったが、その彼の行為を写真と国旗入りで掲載している。

4. 考察

それでは、ロンドン大会では国家意識、両国の社会や文化的背景が、どのように記事と関わっているのでしょうか。それは北京大会までの傾向と類似しているのでしょうか。それとも変化が起こっているのでしょうか。

まず、韓国では、国名の出現頻度が半減し、「ウリ」の出現数も減った。テコンドーでの2階級メダルなしという結果に関しても批判記事はない。帰化したオム・ヘリョン選手の

活躍についても肯定的である。柔道の判定問題についても、大げさに書きたてることはなく、日韓戦についても、一部否定的な記事が見られるものの、日本サッカーの力を認め、さらにアジアのサッカーの躍進につながる日韓の活躍を肯定的に捉えている。これは、金メダル数において日本を上回るだけでなく、世界5位という輝かしい獲得数であったこと、アーチェリーにおいては団体・個人とも韓国が金メダルだったこと、柔道においては結果的に両者とも銅メダルであったこと、サッカーにおいて因縁の日韓戦で勝利を収めたこと、テコンドーがオリンピック種目として存続するきざしが見えたことなど、明るい材料に裏打ちされた結果であると言える。つまり、オリンピックにおいて1988年のソウル大会以降、メダル獲得数も常に30前後と増加し、世界から注目される国家となったが、今大会でも期待にたがわぬ成績が保てたことへの自信と余裕が、見出しや記事となって表出されているように思われる。一方、国技であってもメダルを取らなければ忘れられ、記事にもならないこと、金メダルを獲得した選手の見出しや記事が他のメダルに比べ圧倒的に多く、トップ至上主義であることは変わりがない¹³⁾。同じく日韓で3位を争った女子バレーボールに関する記事が見当たらないのもその結果と言える。また、兵役問題が常につきまとうのも韓国ならではのことである。

これに対して、日本では、相変わらず「日本」を見出しとして掲げるものが多く、金メダルゼロに終わった国技・柔道については、紙面・選手挙げて悲壮感が溢れている。国籍変更の早川選手についても、韓国の紙面が韓国名と日本名の両方を挙げているのに対して韓国名は挙げず、励ましの言葉として「れんは日本人なんだから」を取り上げている。ここから、ロンドン大会においても、個人より国家にこだわっている日本の姿が浮かび上がってくる。

また、共同体に関しては、「地元」「母校」「職場」など帰属グループとの結びつきは相変わらず強く、それらがほとんど見られず、「ウリ」さえも減少した韓国とは対照的である。さらに、金メダル選手のみならず、銀メダル、銅メダル選手、さらには敗者をも取り上げる日本の記事のあり方は、選手に優しい、あるいは甘いとも言える。しかし、この優しさ、甘さは、勝利至上主義を超えたスポーツの本質を考えさせてもくれる。東日本大震災の被災地の人たちを勇気づけようと立ち上がるアスリートたちの側面を表出してくれるからである。それぞれの競技でベストを尽くすことが、心を砕かれた人々の支えとなることを、そしてアスリートたちの支えともなることを、震災関連の記事は示しているのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

山根・朴(2011)を執筆してから1年以上が経った。そして前回の北京大会からは4年が過ぎ、日本では震災があり、また巡ってきたオリンピックも終わった。このロンドン大会と前回までの大会を比較すると、類似点もあれば、相違点もある。本稿の冒頭で挙げたように、IOC会長は「選手のための五輪だった」と締めくくっているが、記事からはそういう面も見受けられれば、やはり国家を抜きには語れない面も見受けられる。しかし、選手やコーチが国を超えて活躍するようになったことは紛れもない事実で、本稿で取り上げた記事を見ても明らかである。今後もオリンピック記事を考察することで、国・地域・共同体・個人がどのようにオリンピックと関わっていくのかを見届けていきたい。

注

- 1) 2012年7月28日付「朝日新聞東京本社版 朝刊」、ヨーロッパ総局長・沢村互のコラムの見出しによる。
- 2) 2012年8月13日付「朝日新聞東京本社版 夕刊」、IOC会長のコメント記事の見出しによる。
- 3) 本著第1章の日本語版である。
- 4) 日本では柔道については「お家芸」、韓国ではテコンドーについて「国技」が使用されるが、ここでは山根(2011)の「国技」の定義(その国で生まれた伝統的なスポーツ)を使用している。なお、山根(2011)は、本著第4章の日本語版である。
- 5) 本稿の「記事」には、「見出し」を含まない場合と含む場合の両方の意味がある。
- 6) 「職場」には、選手が所属する会社名も含む。
- 7) 本著第4章参照。
- 8) 例1~14、19~23は、選手名、()に選手の階級または種目名、メダル獲得の有無、記事掲載の日付、[]に見出し、「・」の後に記事の抜粋の順に、例23~28は、種目名、()に記事掲載の日付、[]に見出し、「・」の後に記事の抜粋の順に記している。また例15~18の()には日付を記している。
- 9) 母に対する賛辞である。
- 10) SNSとは、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略で、社会的ネットワークをインターネット上で行うサービスのことである。代表的なものに、mixi(ミクシィ)やfacebook(フェイスブック)がある。
- 11) ネチズンとは、ネットワーク市民(network citizen)のことで、インターネットなどの情報ネットワークを使う人のことである。
- 12) ①から⑩までの番号は、上述の選手名後の番号と一致している。たとえば①については、仙田選手に関わる見出しおよび記事だということである。また、番号の後の[]は見出し、「・」は見出しに関する記事、()内は、その見出しと記事が掲載された日付を表している。また、日付には朝刊・夕刊の記載があったほうがわかりやすいものには記している。
- 13) 本著第1章参照。

参考文献

- 市川裕一編集(2012)『週刊朝日増刊 ロンドンオリンピック総集編』朝日新聞出版
- 山根智恵・朴点淑(2011)「オリンピック記事における日韓比較—新聞の見出しをもとに—」『オリンピックの言語学』大学教育出版(本著第1章)
- 山根智恵(2011)「オリンピック選手のインタビュー—談話分析—国技に出場したオーストラリア・中国・韓国・日本選手の比較をもとに—」『オリンピックの言語学』大学教育出版(本著第4章)

【データ】

日本

『朝日新聞縮刷版』 2012年7月26日~8月14日

韓国

「朝鮮日報」インターネットニュース 2012年7月27日～8月14日

[http://srchdb1.chosun.com/pdf/i_service/?gnb_sub]

本論文は、「런던올림픽의 한일 신문 기사를 통한 고찰」『올림픽의 언어학을 읽다 (オリンピックの言語を読む)』(韓国学術情報、2013.2.25)の日本語訳である。なお、韓国人の氏名については、すべてカタカナ表記とした。

